

第二位

「アルジャーノンに花束を」を読んで

1 年 3 組 (T) 天野 未来

知的障害者のチャーリーは読み書きも十分にできず、その言動はまるで幼児のごとく、単純なことも理解できない青年だった。幼い頃からチャーリーは孤独だった。学校ではいじめられ、実の妹に嫌われ、彼が最も愛情を求めている母親にさえ見放された。周囲の人々は、彼が障害者であることを嘲笑し、彼の無知や鈍重さを軽蔑した。チャーリーはその知能の低さゆえに自分が受けている仕打ちさえも理解できなかったが、自分と他者との間には常に、お互いをつなぐことを許さない障壁があるということには気付いていた。

チャーリーと他者との間に障壁を築いていたもの それは「知能」であった。その欠乏はお互いの意志の疎通を妨げ、自分と相手をつなぎあわせることを許さず、チャーリーを孤独へと追いやった。ゆえにチャーリーは知能を手に入れることこそ障壁を取り払う方法であると信じていた。

しかしチャーリーが人為的に知能を増大させる手術の実験台に選ばれ、超知能を手に入れたとき、その考えは無惨に打ち砕かれた。

かつて知能の低いチャーリーを散々からかい嘲笑していた彼の職場の同僚たちは、チャーリーが教養のある天才と化すと途端に彼を避けるようになり、しまいには店長に陳情し、彼を職場から追い出した。しかし自分を嘲笑していたとはいえ、チャーリーにとって同僚たちは仲間であり、友人だったのだ。職場から追放され、友人を失い、肉親の所在も知らないチャーリーは懊悩の中をさまよい続けた。

知能を手に入れても、依然として いや、前にもまして、チャーリーは孤独になってしまった。

なぜなら、チャーリーと、彼を嘲笑する人々との間に真に障壁を築いていたのは「知能」ではなく、ただ単に周囲の人々の「無常さ」と「エゴ」だったからだ。同僚たちを含め、チャーリーの知能の低さを嘲笑していた人々は、チャーリーの人格を軽視して理解しようとしなかった。チャーリーがどんなにひたむきに生きても、彼らにとってはただの「うすのろ」だったのだ。『弱肉強食』？ 知能障害者を嘲笑するような人間が強者であるはずがない。ただ知能の低いチャーリーを弱者とみなし、歪んだ優越感の影に隠れていただけだ。このような人々がもし、相手を思いやる心をもっていたならば、チャーリーはどんなに救われたことだろう。

それは私たちにも言えることではないだろうか。私たちは一人一人が個人であり、人種、文化、経済的又は社会的身分から、年齢や性別、性格、知能レベルにいたるまで、それぞれが異なるものを持っている。そして私たちは、自分と異なるものを持つ相手との間に境界線を引きがちである。やがてそれは障壁となり、そこにはしばしば争いや憎しみや誤解が生まれてしまう。それは、いじめであったり、差別であったり、戦争であったりする。この障壁を消すことができたなら、どんなに視野が明るく開けるだろう。どんなに世界が美しく見えるだろう。それを可能にするには、もっとお互いを尊重し、理解し、認めあうことだ。相手の痛みをともに感じ、思いやらなければならない。そこにはきっと、依存も疎外も存在しない、各々の独立があり、真の信頼と愛があるはずだ。チャーリーが自分と同じく人為的に知能を増大させる手術の実験台となった、アルジャーノンというねずみの亡骸に花を供えたように。たかがねずみ。だがチャーリーは、その痛みや悲しみを知っていたから、アルジャーノンの死のために涙を流したのだ。

それは知らず知らずのうち、彼が求めていた「他者とのつながり」を実現させていた。相手に対する思いやり、共感する心、愛情。それは相手とのあらゆる障壁を消し去り、固く確かな絆を作り出していた。自分と他者との間に障壁を築くのは、性質の違いでも、力の差でもない。問題はそんなことではない。問題は、そのような自分と相手との異なる点を障壁だと決めつけてしまう自分自身にあるのだ。自分と他者にいくつか、いや数多くの異なる点があったとしても、私たちは何ら変わらない同じ生命であることを忘れてはならない。

見返りも期待せず、自分の損得に関係なく本当に相手を思いやり、尊重し、理解し、認められる、そういうひとに何人か出会ったことがある。その人たちは孤独と戸惑いの中にいた私の心に架け橋を渡し、人間と人間のつながりとは、ときに誰かを傷つけ、不快にさせ、疎ましいものになってしまうが、相手を心から思いやることによって素晴らしいものになり得るものだということを教えてくれた。だから思いやる心を何よりも大切に・・・それはこの本の作者の想いである。チャーリーが本当に求めていたもの、そして彼を癒したものは、「知能」ではなかったのだから。

書名「アルジャーノンに花束を」

著者名「ダニエル・キイス」

出版社「早川書房」